



NO. 40号

《編集発行》

新潟シティガイド

《発行人》

神田 剛

「小池上文書」

資料紹介



旧小澤家住宅学芸員 若崎 敦朗

新潟市歴史博物館に所蔵されている小池上文書について、その内容の一端をご紹介します。小池上文書は八六〇点に及ぶ資料群で、江戸後期から明治・大正期における旧新潟町の商業取引の実態の一端を知ることができ、貴重な資料です。具体的には、江戸後期から大正期にかけての売買関係の帳面が大半を占めるいわゆる経営資料です。小池上家は小熊屋と称し、当主は代々春五郎を名乗り新

潟町で商売を行いました。実は石見国高津湊（益田）の大竹家岩崎屋で、幕末期に新家し新潟へ移り住みました。幕末から明治初期には廻船を所持し、後に廻船問屋業や紙問屋を営みました。元は浜手の龍照寺付近の東請地町に住していましたが、明治十三年には中心市街地で且つ廻船問屋が建ち並ぶ上大川前通の八番町へ移り住み店の格を上げました。



幕末期の資料からは、七〇〇両余で神力丸を新造したこ

- ・聞いたことは忘れる
- ・見たことは思い出す
- ・体験したことは理解する
- ・発見したことは身につく

とをはじめ、所持船に越後産の米を積載し他国で売却する一方、塩・綿を買い入れ売却した買い積みに関するものがあり、当時の廻船経営の一端がわかるものがあります。明治前半期までの資料では、取り扱う商品の品種や数が増加していることから、それに伴い新潟町内外の取引先が増加し商売も大きくなっていった様子が見えてきます。小池上家が取り扱った商品は、新潟県内で生産されたものと県外で生産されたもの、すなわち新潟港を出入りする移出・移入品の二つに大きく分類されます。移出品の構成は、米を主にして、米粉（荒粉・白玉粉）・豆類（大豆・小豆）・酒（日本酒・焼酎）・油類（桐油・石油・チャン）・果物（リンゴ・梨）・乾物（蕎麦・焼麩）・調味料（醤油・味噌・酢）などです。移入品では紙類・金属類

（鉄・銃・錫など）・織維類（綿・古着）・砂糖類・蠟・塩・石材・農産物（空豆）・乾物及び塩乾物（鯉節・昆布・身欠き鯨・数の子・鮭・雲丹など）・油類（種油・鯨油）・石灰などがありました。



資料を見ていくうちに新発見の事実もありました。新潟市の三大財閥の一つに数えられる齋藤家（喜十郎家）との焼酎の取引があったこと、齋藤家は新潟で清酒と焼酎を自家製造していたとされましたが、その製造と商取引の実態は不詳でした。今回発見された資料は小池上家が齋藤喜十郎から北海道向けの焼酎を購入した事実（価格・販売個数・手数料など）がわかるもので、齋藤家の焼酎製造の実態の手がかりとなる貴重な発見となるものです。

えんでこまち歩き

「沼垂発酵食巡り」



八木 洋

六月十二日（土）えんでこ「沼垂発酵食巡り」のガイドを担当しました。このコースは、えんでこが始まった翌年の平成二十三年（二〇一一）秋に初めてお目見えし、三つの味噌工場と二軒の酒蔵を見学するものでした。今回の採用は久しぶりで、中央区との事前の打ち合わせでは、酒蔵一軒が廃業しており、またコロナ禍ということもあって、はたしてこのコースが成り立つのかと危惧されました。しかし、コースは沼垂町並み散策をベースに、沼垂ビールと今代司酒造を見学させてもらうことで実施の運びとなりました。当日の参加者は十五人、応募は七十二人とのこと、まだまだコースのタイトルには魅力があるようです。ガイドは深沢さん、浅野さんと八木の三人。定刻の十時、東地区総合庁舎を出発しました。万代町通りからぬったり古町通

りに少し入って、味噌製造の坂豊商店を外観で説明。引き返して栗ノ木バイパスを渡り沼垂定住三百年記念の碑、孫助小路から小唄勝太郎像へ・・・沼垂テラス商店街から本町通りの沼垂ビルに十時四十五分、三つのガイドグループが間を開けずに到着しました。

沼垂ビルは、地元出身の高野氏が「発酵の町沼垂」の再興を願って、平成二十八年に立ち上げた小規模クラフトビルです。工場内での説明に氏の熱い思いが感じられました。沼垂ビルを辞し、本町通りを南へ進んで乙子神社、沼垂白山神社を訪れました。



ここは沼垂のまち歩きでは欠かせないところです。さらに、沼垂小学校へ続く道路の前を通って終点の今代司酒造に到着。建物の前で、明治三十年頃東堀通十二番町にあった但馬屋から別れて、栗ノ木の伏流水と舟運の便に恵まれた鏡ヶ岡に山本酒造場を創業したこと等を簡単に説明し、十一時三十分予定通りガイド

を終了しました。この後、参加者は中央区の職員とともに内部の見学に向かいました。



えんでこガイド

「関屋分水と旧競馬場跡地散策」



佐藤 レイ子

コロナ禍の中、えんでこ前期の「関屋分水と旧競馬場跡地散策」のガイドを行いました。

定員二十人、ガイド一人につき参加者五人という理想的な人数です。ところが応募者は何と定員をはるかに超える五十四人だったとのこと。コロナ禍でも皆さん外歩きを望んでおられます。

当日の天気予報は雨でしたが、時折雨も止み暑くもなく男性二人、女性三人、検温と

手指消毒、マスクで感染対策をし、関屋駅を出発しました。私が新潟に来た昭和四十五年には、既に競馬場は豊栄に移転していて、関屋分水の建設真っ最中でした。

関屋駅を出て旧競馬場に続く道は「オケラ通り」と言われ、競馬に負けて財布がカラになり、帰りの汽車賃も無くなった人達が大量通ったことから付いたとのこと、当時の繁栄の様子が目に浮かびます。リピーターの方もおられたり「初めて分かりました。」等、反応も様々。またこのコースは歩く距離も長く体力も必要です。関屋分水建設は、競馬場の跡地が代替地となった為、比較的早く進んだのでしょうか。競馬場のコーナーのなごりが道路として残っている所もあります。

強い風に「帽子を飛ばされないようにね。」と言いながら浜浦橋を渡り、このコースの



中間地点「関屋分水資料館」に到着。此処では水害の歴史等を知ることができます。昭和四十七年に通水し、洪水に耐えられる流量に調節する目的で作られた関屋分水も来年で通水五〇年を迎えます。さらに信濃川上流にある「大津分水」は通水一〇〇年を迎えると言います。新潟平野を水害から守る事に多大な貢献をしてきました。反面、負の面も忘れてはいけません。

関屋分水記念公園を通り、海浜植物園に向かいました。昔は砂浜が広がっていた海岸も浸食が進み、貴重な浜辺の植物、スナピキソウ、バマボツス、バシクルモンなどが激減しています。何とか保護したいものです。未熟なガイドですがこれからも研鑽を積んでいこうと思っています。



どじろカフェ

明治の数学事情



本田 富義

鶴と亀が一〇〇匹います。足の数が二七四本るとき、鶴と亀はそれぞれ何匹でしょう。これは江戸時代からのとんち問題「鶴亀算」です。中国から伝わった数学は日本で独自の進化をして「和算」という学問になりました。

江戸時代の教育システムは寺子屋でいろは文字の読書き、次いで文章や手紙の書き方、庭訓を習います。そして四書五経、孟子、孔子、仏教の経文、名勝負といわれる戦法等を読み解き、陽明学、朱子学へ進みます。「数学」という学問や算盤は必須科目ではなく一文二文と数え、利がいくらかを考える手法と捉えられていました。土農工商の下部の商人の勉強は読書き算盤といわれ、武士にとって数学は後回しの、未就学でもない学問とされてきました。

幕末になると武士集団の戦いに加えて銃をもった農民兵

等、新型の鉄砲と兵隊の数が戦いの勝敗を決するようになってきます。

黒船来航から対抗の為、軍艦を入手、外国人教師による操船、海洋の学習や軍事訓練にも数学が必須となります。開国による外国貿易も欧米共通のギリシヤ数学・洋算が必要となりました。



明治五年、国立銀行が開業し寺子屋に変わる学校ができ「洋算」が採用されます。和算は衰退していきませんが下級武士が必要に応じて得た数値管理能力は変わりません。そんな時代背景と数値管理能力が八木朋直の生涯を支えました。米沢藩の下級武士でありながら戊辰戦争終決からわずか七年で国立第四銀行の二代目の頭取に推挙されました。また「青天を衝け」で人気の渋沢栄一も埼玉の藍玉農家の出身です。仕官した一橋家では算盤による活躍をみせ慶喜

の弟、昭武のバリ万博に会計方として随行しています。江戸時代の下層地位の八木朋直や渋沢栄一が数学を武器に頭角を現すこととなります。「にじいろカフェ」では価値観が大きく変革した時代に生きた、同世代の二人の交流を取り上げました。気脈を通じて残した掛軸の共書や手紙などから、老境に余計な力の抜けた心持を紹介しました



「イザベラ・バードが見た

明治の新潟を歩く」



小野塚 昭美

イザベラ・バードが訪れた新潟を各エリアのガイド達が案内する、大胆かつ魅力的な事業も今回で二回目となります。昨年はコロナ渦の為やむなく中止となりました。初年

度はどこのエリア（津川・大野町・沢海・新潟・木崎・中条）も定員をオーバーする応募者があり、イザベラ・バードという女性に興味をもっていただき本当に嬉しかったです。今回はコロナ渦ということで参加者も減少するかと思われましたが、前回同様たくさんのお申し込みがあり、この企画が皆様に受け入れていただけた事に感謝しかありません。バードが旅した新潟の各地を地域のまち歩きガイドがそれぞれの特徴を生かし、明治の風景と文化を、時空を超えた現代と重ねあわせ歩くツィンタイムトラベル。

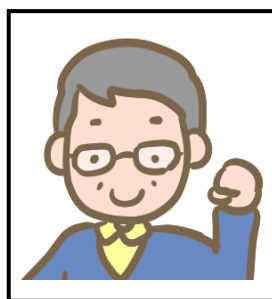


このようにテーマをもって他地域と連携する企画は、今後のまち歩きにも魅力的なプログラムの一つとして生かせるのだと思います。まさにイザベラ・バードのまち歩きが、そんな魅力的な一歩となればと思っております。このまち歩きの企画を立ち上げた伊藤頼子さん、いつも

サポートして頂いている心強い味方の路地連新潟代表の野内隆裕氏、新潟町を魅力的にまた正確に翻訳された京都大学名誉教授の金坂清則氏に、改めて感謝申し上げますと共に新潟にも隣県の山形のようにイザベラ・バードの足跡を表すモニュメントができる日を夢見ている今日この頃です。



フォトコンテストから思い浮かんだこと



針貝 博明

我が家には古いカメラが四台もある。フィルムを装填して写すタイプである。その中の一台は、蓋を開けて上から覗き込みながら撮影する仕組みになっている。昭和三十年代に購入したもので、当時はとても高価だったと聞いています。十二枚撮りの幅の広いフィルムを使用し、撮影できる

枚数が少ないため、失敗しないように慎重に撮影していたことを憶えている。そのせいかアルバムの写真は、皆が直立不動で緊張した面持ちで写っている。この夏、市主催のフォトコンテストの審査員役を仰せつかった。最終審査の段階だったのでどの作品も力作ばかりだった。中でも信濃川に架かる萬代橋を背景にしたある作品にすごく惹かれた。他の審査員の方たちからも同様に評価され、その作品が見事にコンテストのグランプリ作品に選ばれた。



グランプリ

一見すると、どこの街なのか分からない。「近未来的な新潟市を象徴している。」と、ある審査員の方が感想を述べておられたが、私も同じ気持ちで審査をさせて頂いた。「水」をテーマにした、インスタグラムで新潟の魅力を発信するに相応しい作品がグランプリの候補となっていて、とてもレベルが高いフォトコンテス

トだった。今どき、フィルム式のカメラを使う人はほとんどいないだろう。デジタルカメラは撮影枚数を気にせずに撮影することができ、気に入らなければ削除して撮影のやり直しができる。そのため、撮影する側は勿論のこと、被写体側も撮影の失敗を恐れず気楽に応じることができ、だからデジタルカメラの作品は、自然体で表現豊かな画像に仕上がるのではないかと思う。まち歩きガイドで、お客様に昔の写真を参考資料として見せることがよくある。現在とは全く違った街の様子が写っている画像を見ると、お客様は一層興味深くガイドの説明を聞いてくださる。今は写真などの資料は、コピーしたものをそのまま提示することが多い。例えば、スキャナーやパソコンを駆使してトリミングなどの画像処理をすれば、さらに見易くて面白い資料の提示ができるようになる。今後は、デジタル技術を活用したガイド資料が、ガイドをする上で非常に役に立つツールの一つとなっていくのではないかと思う。



沼垂町並み散策

「えんでこ」



山本 逸郎 (画)

「えんでこ」沼垂町並み散策に参加しました。雨の心配もなく自転車でも東地区総合庁舎に到着。私の班は六名「目の不自由な男性と付き添いの方がいらいしやいます。宜しくお願ひします。」目の不自由な方のガイドは経験が無く、参加には感激の念が湧き出てきました。しかし、何の準備もない。「えんでこ」への考えの浅かったことに反省大でありました。今までの資料+αで行くことにしました。

最初は「永井雲坪生誕碑」。医家に生まれたが、南画を習得も絵の売れぬまま六十七歳で死去。死後評価され近代屈指の大家の列に入った。隣りは「ぬつたり古町通り」の碑。「沼垂」移転前は漁師と魚の行商人が住んだ小路である。目の不自由な方に碑文を手で触れてもらった。碑の上から下方に両手を左右に動かしながら碑面を触れておられた。

「なかなかの達筆ですね。」触觉での理解に驚きました。草の茂る小公園には「ここに栗の木川ありき」の碑。元々上流の長峰橋の東側にあったが昭和四十三年、道路になる為移設されました。由来や、沼垂になくはならない川だった事の説明の後、碑面に触れて貰いました。「ここに栗ノ木川ありき」「新潟県知事君健男」と、しっかりと書ですね。君さん県内にもいくつか碑がありますね。『君』は知事、『僕』は高校三年生でした。」

料亭「鶴善」跡地の「勝太郎生誕百年記念」の石像は、沼垂に生まれ「鶴善」の養女となった本名「佐藤かつ」です。沼垂小学校に通いながら「芸妓」の修業をしました。黒い勝太郎の石像に触れて「日本髪、三味線を弾いていますね！これは撥ですね！東京ヤクルトスワローズの応援歌『東京音頭』が聞こえてくるようですね・・・」



初めての経験でガイドに時間ばかりでしたが、一緒にまち歩きできた事に大変感動しました。

広報からのお願ひ

- 1 広報紙「新潟シティガイド」の原稿依頼
広報紙の紙面は、会員の皆さんの投稿原稿で成り立っています。原稿依頼をお願いすることがあると思いますが、ご協力をよろしくお願いいたします。
- 2 「新潟まち歩きブログ」への投稿依頼
「新潟シティガイド」をより多くの方にとって頂くため、投稿をよろしくお願いいたします。
なお、原稿を頂ければ代わって投稿も致します。

編集後記

広報紙に載せる写真を撮るため、いくつかのコースに行かせていただきました。えんでこは、班のお客様もそれぞれです。ガイドの話に引き込まれ、最後に拍手がお客様より送られ、ガイドとお客様との一体感に感動した日もありました。

また、目の不自由なお客様にも楽しんでいただけよう手で触れていただき、想像できるようなガイドの工夫は、大変勉強になりました。

ほかに、ガイド場所所でカセットデッキから唄を聞かせてくださったり、まち歩きを楽しみ工夫を凝らした場面を見ることができました。

ガイドの説明も写真や資料などお見せできると、想像しやすく、話しもわかりやすくなります。今後ますますデジタル資料の活用も進化すると思います。

同じコースでも、ガイド内容は同じものではありません。「一期一会」一生に一度の出会いであると思得て、あらためて一回一回のガイドを大切にしていこうと思ひました。

広報 佐藤祐美子



広報紙
Back Number



Instagram

*次回の広報紙は
来年四月発行予定です。